

「従軍する権利」をめぐるダブルバインド： 1970年代アメリカ合衆国におけるゲイ解放運動とベトナム反戦運動 高内悠貴

はじめに

2011年、米軍の同性愛者兵士の従軍を規制するDADT (Don't Ask, Don't Tell) 政策が撤廃されたことは記憶に新しい。1993年に制定されたDADTは、軍隊が兵士に性的指向を尋ねることを禁止する (Don't Ask) かわりに、同性愛者の兵士が性的指向をカミングアウトすることを禁止してきた (Don't Tell)。DADTの撤廃は、1992年のDADT制定過程からすでにその差別的な性格を批判していたLGBT運動の努力が実を結んだ成果として、ひとまず評価できるだろう。さらに、DADT撤廃はアメリカ合衆国において全国的なゲイ運動が誕生した1950年代以来、常に運動の課題であった軍隊における同性愛者という問題に区切りがついたという意味でも画期であったと言える。

しかし、DADT撤廃に対する反応は一様ではない。Democracy Now! が放送したDADT撤廃運動のリーダーDaniel Choiとクィア運動の活動家であるMattilda Bernstein Sycamoreの対談において、Sycamoreは「軍隊に加入するための闘争は、殺すための闘争だ」として、DADT撤廃運動がイラク、アフガニスタン戦争に加担し、LGBT運動が軍事化されることに対する警鐘を鳴らした。Choiはそのような問いは道徳的、倫理的問いであり、DADT撤廃の問いはあくまでも法の局面で行われているとして、Sycamoreの追求を退けた (Democracy Now!, 2010)。2010年のDADT撤廃運動では、LGBT権利団体やLGBTの退役軍人団体、LGBTフレンドリーな議員たちはあくまでもDADTの差別的な性格に議論を集中させることで、対テロ戦争の是非や米軍のマン・パワー政策の問題といった論点を棚上げにした。彼らは高い能力を備えているにもかかわらず、愛国的な市民としての献身が評価されていない同性愛者兵士のイメージの求心力に訴え、カミングアウトして誠実に、正直に従軍できないことは同性愛者の「従軍する権利」を侵害すると主張することでDADT撤廃への支持を獲得することに成功したのである。

LGBT運動の軍事化を批判するSycamoreの意見は2010年には少数派であっ

たが、1970年代の運動を知る人にとっては馴染みのあるものでもあっただろう。1970年代初頭に米国で展開したゲイ解放運動はベトナム反戦運動にも積極的に加わり、ゲイの「従軍する権利」の要求には否定的な態度を示した。彼らは軍隊が同性愛者を排除しているという事実抗議するというよりは、それを逆手にとって徴兵を避けようとしたし、時にはゲイ解放という究極の目的のためには軍隊という制度自体の撤廃が必要とさえ主張したのである。このように、70年代のゲイ解放運動が公民権運動やベトナム反戦運動、女性運動など同時代の他の社会運動との関わりの中で、異性愛主義のみならず人種主義、帝国主義、資本主義など様々な抑圧の形態に対する批判へとその運動の射程を拡大していったことはよく知られている。

1960年代に花開いた多様な社会運動の相互関係に注目する歴史研究が登場したのは近年のことである。このような研究が登場した背景には、第2次世界大戦後の公民権運動から、70年代のマイノリティ運動、さらには現在のリベラル派の運動を、その相互の関係に着目して包括的に検討する枠組みである「長い60年代」論の登場がある (Hayden, 2009)。「長い60年代」論は、それ以前の1960年代研究がしばしば当時の社会運動の内部または運動間の対立をそのまま引き継ぎ、1960年代の前半を民主主義的で広範な支持を得た公民権運動と学生運動が展開した「良い60年代」、後半をブラックパンサー、ウェザーマンらによってラディカル化、暴徒化したために運動が孤立した「悪い60年代」として切り分けて論じようとしてきたことへの批判として登場した (Hall, 2008)。「長い60年代」論の立場からは、Carl Wittman といった著名なゲイの活動家が民主社会学生同盟 (Students for Democratic Society, SDS) に参加しており、学生運動がゲイ解放運動に大きな影響を与えたことなどが指摘されてきた。しかし、このように公民権運動や学生運動がその後花開いたマイノリティ運動に与えた影響を強調し、その連続性を評価する語りにおいては、フェミニズム運動やゲイ運動がそのような運動に影響を受けつつも、そこで限界に直面したからこそ彼らを批判し、自分たちの運動を展開したという事実が背景に退きがちである。女性やゲイたちの批判を無化しつつ包含することで、批判されていたところの性差別やホモフォビアを歴史的な語りの中で反復してしまう危険は避けなくてはならないだろう。

一方、米国のゲイ解放運動についての先行研究においては、ゲイ解放運動の指導的地位が白人で中産階級のゲイ男性に占められていたことへの批判から、運動内部の差異の政治や葛藤を明らかにすることが重要なテーマの1つであった (D'Emilio, 1998; Faderman, 1991; Meyerowitz, 2004)。同時代の他の運動との関係については、フェミニズム運動やブラックパンサーとの関係 (Kissack, 1995) や新左翼運動との距離 (Lekus, 2004) などが取り上げられてきた。ゲイ解放運動のベトナム反戦運動への参加について直接扱ったものとしては、Justin David Suranの論考が挙げられる (Suran, 2001)。Suranは、60年代のベトナム反戦運動のラディカリズムの影響を受け、ゲイ解放運動に参加していたゲイたちが、ゲイ・アイデンティティを性的指向のみならず、政治的にラディカルであることを含意するものとして理解していたことを論じ、ゲイ解放運動のアイデンティティ政治の意義を再考している。本稿は、Suranの指摘する60年代の政治的なラディカリズムがゲイ・アイデンティティの構築に対して与えた影響に注目しつつも、同時に、軍隊からそもそも排除された存在であったゲイたちが展開した反戦運動と主流の反戦運動の間に生じた葛藤に注目し、その葛藤がゲイ解放運動の反戦運動を異性愛者のそれと異なる展開に導いたことを指摘する。さらに、ゲイ解放運動とベトナム反戦、徴兵制反対運動における人種と階級の政治に着目することで、ゲイ解放運動のラディカルさを可能にする条件やその限界に考察を進めたい。これは、70年代のラディカルなゲイ解放運動を、第2次世界大戦後から2010年代まで取り組まれてきた同性愛者の従軍をめぐるLGBTの政治運動史に位置づけるために必要な作業である。

本稿の主な分析対象となるのは、徴兵に際して自身の性的指向を隠すか否かという選択を迫られたゲイ男性による反戦運動と徴兵制反対運動である。具体的には1970年代初期のゲイ解放運動の代表的な団体であるゲイ解放戦線 (Gay Liberation Front, GLF) のカリフォルニアの支部 (ロサンゼルス支部、サンフランシスコ支部、バークレー支部) の活動を中心にとりあげる。ゲイ解放運動にとって、反戦運動や徴兵制反対運動への参加がどのように位置づけられ、どのような意義をもったのかを考察するためには、彼らのゲイ「解放」のヴィジョンとゲイの「抑圧」についての彼らの分析の輪郭をつかむ必要があ

る。このため、一次史料として、カリフォルニアで当時発行されていたゲイ・プレスや、GLFの発行していたパンフレットなどに著されたゲイ解放運動家たちの反戦、反徴兵制のための批評をとりあげ、分析していく。第1節ではゲイ解放運動の前史として第2次世界大戦以来の米軍における同性愛者に対する政策について振り返る。第2節では70年代のゲイ解放運動が、ゲイ解放とベトナム反戦の間にもどのような繋がりを見出し、反戦運動に関与するようになったのかを明らかにしたい。続く第3節で、ゲイ解放運動がいかに同性愛者の運動とは異なる問題意識と手法をもって徴兵制に対して抵抗したのかを分析する。さらに、ゲイ解放運動がその限界に直面し、次第にベトナム反戦という「戦線」から撤退した過程を確認したい。最後に、ベトナム戦争終結後、再び同性愛者兵士の問題が注目を集めた90年代から2010年代の運動が、「従軍する権利」を要求するようになった変化の背景を理解するために、同性愛者の従軍をめぐるLGBTの政治運動史にベトナム反戦の影響を強く受けたゲイ解放運動を位置づけ、考察を加えたい。

1 従軍と市民権：軍隊をめぐる同性愛者の政治運動の歴史

20世紀米国のゲイ運動にとっての軍隊の問題の重要性を確認するために、まず米軍において同性愛者兵士がどのように処遇されてきたのか、その歴史を確認しておきたい。米軍においてソドミー行為の禁止に加え、同性愛者の摘発とその排除が積極的に行われるようになったのは第2次世界大戦中である。参戦にあたって多くの男性を徴兵する必要があったことから、軍隊の関心はソドミー行為の事後的な規制から、身体や人格の逸脱を検出し、先回りして同性愛者を排除することに移っていった。ソドミーの罪で除隊にする場合はソドミー行為が実際に存在したことを裁判の過程で証明する必要があったが、同性愛傾向を理由に除隊する場合には、医療の専門家に、当該兵士に同性愛傾向があり従軍に不適格であると宣言させるだけで除隊させることが可能であるためである。軍は精神科医らと協力しながら、女性的な身体的特徴、第二性徴の特徴の欠如といった目に見える身体的な特徴を、同性愛の兆候として適性検査の際にチェックした (Canaday, 2009; Lehring, 2003)。第2次大戦時に同性愛者であることを理由に除隊された場合、退役軍人に対する保障を定めた1944年の

GIビル (The Servicemen's Readjustment Act) の恩恵を受けることができなかった。このため、第2次世界大戦直後の1945年に退役軍人慈善協会 (Veterans Benevolent Association) というゲイの退役軍人による自助団体が結成されているが、これは1950年代のホモファイル運動を牽引したマタシン・ソサイエティの誕生よりも早い (Bérubé, 2010, p. 249)。20世紀後半に全国的な広がりを見せるようになったとされる米国のゲイ運動の歴史において、同性愛者兵士の問題は最も早い時期から取り組まれてきた課題であり、運動の誕生を促した直接的な要因の1つでもあったといえる。ソドミー法や同性愛の病理化などに比べて直接的な利害関係者が相対的に少ない同性愛者兵士の問題が、常に重要な課題の1つであったことは意外なことと思われるかもしれない。この背景には、とりわけ米国において差別されてきたマイノリティ集団が従軍という形で愛国主義を表明し、市民としての義務を果たしたことを訴えることで「1級市民権」を獲得することができるという考え方が広く受け入れられてきたという経緯がある (Oropeza, 2005, p. 5; Westheider, 1999, pp. 2, 9)。¹ このため同性愛者の兵士の問題は、同性愛者の兵士たちだけでなくLGBTコミュニティ全体に関わる問題として取り組まれてきたと言えるだろう。

第2次世界大戦が終了し、マッカーシズムが社会を席卷した1950年代の米国では、共産主義者とともに同性愛者もアメリカ社会に対する脅威として弾圧されることになった (Johnson, 2004)。このため、第2次大戦直後の1946年にはソドミーを理由とした除隊を名誉除隊とすることで態度を軟化させた米軍も、48年にはそのような兵士に対する名誉除隊を定めた条項を削除した。さらに、1953年の大統領令10450では性的倒錯者は連邦のいかなる職にも就くことができないと定められた (RAND Corporation, 1993, p. 6)。結果、1950年代には軍隊の規模は第2次大戦時に比べて縮減されたにもかかわらず、大戦時と同じく毎年2000人ほどが除隊されており、第2次世界大戦時よりも除隊の割合は10倍に増えた (ibid.)。同性愛者兵士に対する規制が厳しくなるにつれ、同性愛的傾向をもつという疑いをかけられた兵士は、より重大な罰を受けることを避けるためにほとんど抵抗もできず除隊させられることになった。一連の連邦政府による政策は兵士や政府職員の同性愛者だけでなく、多くの同性愛者たちの生活を脅かした。このような事態に対して危機感を持った同性愛者

たちが展開したのが1950年代のホモファイル運動である (D'Emilio, 1998)。彼らは雇用差別の問題の1つとして同性愛者兵士の差別問題にも取り組んだが、1970年代のゲイ解放運動に参加した多くの若いゲイたちはこれに反発した。彼らにとっては、軍隊での差別の撤廃を求めることはベトナムでベトナム人を殺し、また自分の命を危険に晒す「権利」を要求することであり、到底受け入れられるものとは考えられなかったためである (Suran, 2001)。

このように同性愛者兵士の差別という問題に対するゲイ運動の態度が変化した背景にはベトナム反戦運動、とりわけ徴兵制反対運動があった。米国のベトナムへの干渉の起源は第2次世界大戦が終結した1945年まで遡ることができるが、ベトナム戦争が多くのアメリカ人にとっての関心事となったのは1964年のトンキン湾事件であり、1968年のテト攻勢で多くの米軍兵士が命を落としたことや、ソンミ村の虐殺事件によってベトナム戦争の非人道的な性格が広く知られるようになり、ベトナム戦争への反対が多数派を占めるようになった (Burns, 1990)。1965年4月のワシントンD.C.での最初の大規模な反戦デモ以降、若者を中心に全米に拡大した運動は、1968年に大きな分岐点を迎える。晩年に貧困問題と反戦運動に取り組みはじめていたMartin Luther King Jr.の暗殺や、プラハの春やフランスでのゼネストといった国外の動き、さらに1968年5月には1週間当たりの米軍兵士の最大死者数を出したことなど様々な要因が重なり、反戦運動の内部でイデオロギー的な転換が起こった。いままや、ベトナム戦争という特定の戦争とそれに対する政策が誤っているだけでなく、戦争は米国の経済的・政治的システムの論理的な帰結、つまり、米国の企業や政治的、軍隊のリーダー達が欲し、必要としているものだと考えられるようになった。彼らは戦争に対する批判をより根本的なアメリカ社会とその人種主義、帝国主義批判へと押し広げ、南ベトナム解放民族戦線 (NLF) への積極的な支持を表明した (Foley, 2003, pp. 265–272; Varon, 2004)。本稿で検討する1970年代初期のゲイ解放運動を代表するGLFの反戦運動はこのような変化の延長線上に位置づけられるものである。

1960年代後半にベトナム反戦運動が若者の間で全国的な広がりを見せた背景には、徴兵制の問題があった。1966年までに徴兵者数は1964年の水準の4倍になっており、多くの若い男性にとって、ベトナムでの戦闘に加わり、自ら

の身を危険に晒すことへの危機感は現実的なものとして感じられるようになっていた (Foley, 2003, p. 52)。加えて、徴兵制が切迫した政治問題となったのは、全体の人口比に対して労働者階級や黒人の兵士の割合が高く、さらに彼らの死亡率や負傷率が高いということが明らかになったためである (Foley, 2003, pp. 55–56)。これは徴兵の段階でどのような徴兵猶予のオプションを利用することができるか、さらに徴兵された後でどのような部隊に配属されるかという問題に関わっている。大学に通うことのできる財政的資源に恵まれ、大学生のための徴兵猶予 (2-S student deferment) を利用できる白人の中産階級の大学生よりも、労働者階級や黒人の若者の方が徴兵されやすく、高度な専門知識を要しない地上部隊に配属されやすいという構造的な問題の存在が認知されるようになった (Westheider, 1999)。1966年1月に学生非暴力調整委員会 (Student Nonviolent Coordinating Committee, SNCC) の John Lewis が徴兵制反対運動を支持したのに始まり、ラディカルな黒人運動の団体は平和的なデモよりもドラフトカードを燃やしたり、徴兵センターを閉鎖に追い込むなどの直接行動が必要だと主張した (ibid.)。徴兵制反対運動は反戦運動の一部であると同時に人種や階級の不平等との闘いでもあった。

2 「彼らの敵は我々の敵だ」：ゲイ解放運動とベトナム反戦運動

1960年代後半に盛り上がりを見せた反戦運動に、ゲイたちは当初から加わっていた。SDSに参加していた Carl Wittman や Allen Young、War Resistance League の創設に関わっていた David McReynolds に加え、92年の大統領選挙で LGBT コミュニティとクリントン政権を繋ぐのに大きな役割を果たした David Mixner も、当時まだカミングアウトはしていなかったが、1969年のモラトリアム運動のリーダーだった。このようなゲイの反戦運動のリーダーの例や、抗議活動やデモへのゲイの参加の例は枚挙にいとまがないが、Mixner がモラトリアム運動のなかでカミングアウトすることを躊躇したように、学生運動や反戦運動の内部にあるホモフォビアのためにしばしばゲイたちは疎外感を味わうことになった (Mixner, 1996)。Young は、「我々の闘争は、自分たちの闘争が『より広い闘争』の一部であり、自分自身を『真に革命的である』と感じているストレートの人々によって否定されている。我々が反戦デモに参加

しても、ゲイ運動が正当と認められることはない」(Young, 1971, p.58) と言
い、ストレートの左派運動が左派の大義に賛同する存在としてしかゲイを運動
の主体として認識せず、ゲイ解放という大義に関心をよせないことを批判し、
広く共感を呼んだ。

主流社会や軍隊だけでなく、反戦運動内部のホモフォビアのために、ゲイた
ちは自分たちのための運動を展開する必要を感じていた。そこで新しい運動が
誕生する契機となったのが1969年6月のストーンウォール暴動であり、それ
に続くGLFの結成である。² GLFはNLFにちなんで名付けられ、GLFのNLFに
対する支持と連帯の表明であり、GLFが68年以降にラディカル化しつつあっ
た反戦運動の流れを組んでいることを示している。ストレートの左派運動の中
でゲイであるがゆえの疎外を経験した彼らの運動は、ゲイであるというアイデ
ンティティや経験を核とし、運動の目的であると同時にその手段でもあるカミ
ングアウトを重視した(Wittman, 1969)。当時、カミングアウトは単に性的
指向を公にすることにとどまらず、ある種の政治的な立場の表明であると考え
られたことに注意する必要がある(Suran, 2001)。この点は、当時のゲイ・ラ
イティングにおける「ゲイ」と「ホモセクシュアル」という単語の使い分け方
にも見て取れる。当時、ゲイ解放運動の活動家の間ではゲイが固有名詞のよう
に大文字でGayと表記される傾向があり、大文字の「ゲイ」であることと「同
性愛者(ホモセクシュアル)であること」は必ずしも一致せず、大文字の「ゲ
イ」は抵抗運動に関わる同性愛者のことであるとされた(Jackson, n.d. a)。

ゲイとしてのアイデンティティや経験を起点に思考し、カミングアウトを通
じて他の少数派と連帯することによってあらゆる抑圧に抵抗するという態度
は、彼らの反戦運動においても貫かれている。たとえば、ベトナム戦争の退役
軍人による反戦運動組織VVAW (Vietnam Veterans Against the War) のゲイ
のメンバーによって結成されたVVAWゲイ・コーカスは、VVAWの内部に存在
するホモフォビアを告発しながら、以下のように述べている。

ゲイの退役軍人は、他の兵士とともに従軍しながら、同時に特有の精神
的抑圧に耐えなくてはならなかった。その最たるものは、どんな残虐行
為にも躊躇しないことが男らしさの証明であると信じるよう我々を洗脳

するためにゲイ・バッシングが用いられる基礎訓練だ。ゲイのベトナム退役軍人として、我々は軍隊が人種主義だけでなく性差別主義とゲイ・パラノイアの上に成り立っていることを理解した。ゲイの兵士として経験した抑圧によって、我々は戦争の不正義に気がついたのだ。(Gay Caucus of the VVAW, 1971)

彼らは従軍しながら、同性愛者を排除する軍隊の政策だけでなく、味方であるはずの米軍兵士から向けられる暴力、軍隊での基礎訓練など、あらゆる場面でホモフォビアと暴力を経験することになった。そのような経験から、彼らは残虐行為を躊躇することに「男らしくない」というレッテルをはるホモフォビアが、兵士たちをベトナム人への、さらには味方であるはずの同性愛者の米軍兵士への暴力に駆り立て、ひいては軍隊が戦争を遂行するのを可能にしていることを看破した。人種主義や性差別主義という観点からベトナム戦争を捉え直すようにする彼らの分析は、“No Vietnamese ever called me nigger”ベトナム人にニガーと呼ばれたことはない”というスローガンを掲げて反戦の意志を表明した黒人運動や、戦争や暴力を性差別主義の観点から批判しようとした女性運動とも響き合っている。彼らにとって、自由主義陣営を代表する米国とそれに対する脅威である共産主義陣営の対立という冷戦の構図はすでに説得力を持たない。ベトナム人を人種的、性的に他者化することで彼らへの暴力を正当化する米国の「体制」こそが、まさに同じ人種主義と性差別主義に基づく差別を用いて国内においても黒人や女性、ゲイを抑圧していると彼らは考えたためである。そこでGLFサンフランシスコ支部とパークレー支部が共同で採択した「人民の平和条約へのゲイによる前文」は「彼らの敵は我々の敵だ」と宣言する。

我々トランスヴェスタイト、トランスセクシュアル、そしてゲイ男性はアメリカ政府によって行われているアジアの人々に対する虐殺的な戦争は、我々の抑圧の延長であり、この性差別主義的、人種主義的社会的必然の産物であることを認識する。…我々は戦争マシンの一部となり、このシステムと戦争を支持することによって第3世界の人々、女性、そして我々に対して権力を行使することを拒絶する。我々はMANを破壊

すると決意したのだ。

我々ゲイ男性は、ベトナム、ラオス、カンボジアの人々と交戦状態にはなく、彼らに連帯する。彼らの敵は我々の敵だ。この精神に則り、我々は愛と闘争の条約に署名する。("People's Peace Treaty, Gay Preambles," 1971)

このようにベトナム人を抑圧する構造と、自分たちが経験している抑圧の構造に連続性を見出すことによって、ゲイの反戦活動家たちは帝国主義の戦争に抵抗する第3世界の人々の闘争に共感し、時には彼らに同一化することで、彼らとの連帯を表明した。これはゲイ解放運動にのみ見られた傾向というよりは、1960年代後半から70年代にかけて展開したニューレフトや学生運動、反戦運動、女性運動などにも見られた傾向であった。彼らは、第3世界の脱植民地化に向けての運動を、米国の帝国主義や資本主義への抵抗運動のモデルとして積極的に知ろうとしていた。そこで第3世界の政治的リーダーたちは革命の戦士としてロマン化され、東洋を西洋よりも劣ったものとみなすオリエンタリズム的なヒエラルキーは転倒させられる。しかし、国境を越えるシスターフッドのもとベトナム反戦運動を展開しようとした女性解放運動を事例としてWuが論じたように、オリエンタリズム的なヒエラルキーを単純に転倒させることは、人種主義や帝国主義への抵抗というよりは、むしろオリエンタリズム的な西洋と東洋の二項対立の強化に繋がってしまう(Wu, 2013)。オリエンタリズム的な二項対立の枠組みを保持したまま、米国国内で自分たちの経験する抑圧と米国の帝国主義の被害者であるベトナムの人々の抑圧が同一線上にあると想定してベトナムの人々に同一化することは、オルタナティブな価値の源泉として第3世界を他者化してそこに留め置きつつ、自分たちは批判したい米国の「体制」から自らを切り離すことを可能にした。³ そうすることで彼らは自国を批判する足場を確保し、現状とは異なる政治的な可能性を模索することができたとも言えるが、そこでの彼らの連帯の呼びかけは、米国とベトナムの人々の間の国境を越えるというよりは、そこに厳然として存在する差異と権力関係を不可視化することで、彼らのラディカル左派としての政治的アイデンティティやプロジェクトをうち固めるためにベトナム人の人種的な他者性を利用するに

留まるという限界があった。

3 徴兵制反対とゲイの権利保障のジレンマ

第2節ではゲイ解放運動がベトナム戦争に対してどのような態度をとったかを明らかにした。本節では徴兵制の問題に対して彼らがどのようにアプローチしたか、それがいかに同性愛者の徴兵制反対運動と異なる展開を見せたかを明らかにしたい。

米国でのベトナム反戦運動において、徴兵制に抵抗することは戦争の遂行を不可能にするための手段として重要であったが、徴兵カードを燃やすなどして徴兵制度に「抵抗する」とし、猶予規定を利用して徴兵を「避ける」との間には大きな違いがあるとされていた。白人の大学生たちにとって徴兵猶予を利用するのではなく、逮捕される危険を引き受けて徴兵カードを燃やすなどして「抵抗する」ことは、「白い肌の特権」を脱ぎ捨て、不道徳な戦争マシーンから自らを切り離すことをも意味したのに対して、徴兵猶予を利用して徴兵を「避ける」ことは、差別的なシステムを生き延びさせると考えられたためである (Burns, 1990, pp. 78-79; Foley, 2003)。ゲイ解放運動の中にも徴兵制に「抵抗」することと「避ける」ことを区別し、前者こそを重視する主張は見られた (Aiken, 1971)。しかし、軍隊からそもそも排除されていた同性愛者が徴兵カードを燃やすことは、同性愛者がそうする場合と同様に「抵抗」として機能するだろうか。また、軍隊から同性愛者を排除し、ベトナム人に対する暴力を作動させる軍隊の構造的なホモフォビアを告発することができるだろうか。従軍に不適格というスティグマを負わされていた同性愛者には、同性愛者とは異なる徴兵制への反対運動の手法を編み出す必要があったのである。

そこでゲイ解放運動が徴兵制への「抵抗」運動のために採用したのは、カミングアウトという手段であった。たとえば、軍隊から同性愛者を排除する政策を皮肉った "Suck cock to beat the draft! タマを舐めて徴兵をぶっ飛ばせ!" というスローガンがある。彼らはこのようなスローガンを掲げてゲイのセクシュアリティを公に肯定することによって、ホモフォビクな軍隊の政策を逆手に取り、軍隊に加わらない意思と徴兵制度自体への反対を主張した (Kissack, 1995, p. 109)。このようなスローガンは、大文字のゲイであることはつまり

あらゆる抑圧に抵抗することであるとして、ゲイ・アイデンティティ自体にラディカルな革命の可能性を託し、それを「カミングアウト」つまり自らを解放することでホモフォビックなシステムを破壊することができると思える70年代初期のゲイ解放運動の基本的な態度から生まれたものとして理解できる。カミングアウトによって「従軍に不適格」を意味する分類である“4-F”にあえて分類されることにより、ストレートの若者の反戦運動で批判された徴兵猶予規定の利用を「システム」に対するラディカルな抵抗の可能性をもつ行為に読み替えようとしたと言えるだろう。だからこそ、GLFはカミングアウトによって徴兵を「避ける」ことを革命的な同性愛者の徴兵抵抗運動と呼び、“4-F”に分類されるための方法や情報を提供する徴兵カウンセリングの活動を展開した(Gay Liberation Front Los Angeles, n.d.)。

戦争と徴兵制にカミングアウトによって抵抗しようとしたGLFは、2つの種類の異なる問題と限界に直面したと言える。1つ目の問題は、徴兵制への抵抗と同性愛者兵士の権利保障の間のジレンマに関わる。たとえばGLFサンフランシスコは、「ゲイリブの態度を要約すれば『絶対に行ってたまるか』となる。ゲイたちが完全に平等になるには、同性愛者に対する差別的な法律は全て撤廃されるべきだが、徴兵される『権利』の要求は、あらゆる雇用、経済的、資格取得や、教育的、法的そして宗教的な差別が撤廃されるまで延期するべきであるという意見がゲイリブのコンセンサスである。」として穏健なホモファイル運動が軍隊で「徴兵される」権利を要求することを批判する決議を採択した(Jackson, n.d. b)。しかし戦争が続き、同性愛者も徴兵されているという状況がある限り、同性愛者兵士への差別を無視することはできない。当時ゲイ・プレスやアンダーグラウンド・プレスに記事を寄せていた活動家であるHarleigh Kyson Jr.は、「ゲイの軍隊への抵抗運動」と題された記事でGLFの徴兵カウンセリングの活動を紹介しながら、同時に以下のように述べている。

ゲイにとって、徴兵を合法的に逃れるのは簡単だ。なぜなら、政府の規則によって同性愛者の従軍が禁止されているからだ。自分のセクシュアリティを宣言するだけでいい。だが、言うておかななくてはいけないのは、ゲイであること自体が軍隊での従軍やあらゆる職業に対して不適格

であるというわけではないということだ。ゲイもストレートのように軍隊のあらゆる部門で立派に、誠実に、そして勇敢に従軍してきた。その多くはこれからも、政府の偏見をもとめせずに従軍を続けるだろう。（ゲイは連邦政府によって未だに差別されている唯一の抑圧されたマイノリティである。）だから、政府の規則を使って徴兵を回避することと、それを真に受けることは全く別のことなのだ。（Kyson, 1972）

Kysonはここで、同性愛者を従軍に不適格であるとする政府の方針を利用して徴兵を逃れることを勧めながら、同時にその方針を否定するという態度を見せている。ゲイ・アイデンティティを根拠に徴兵を「避ける」戦略には、同性愛者は従軍に不適格であり異性愛者よりも劣った存在であるという偏見を強化してしまう危険があり、既に従軍している同性愛者兵士の状況を問題化できないという限界があった。これに対してはゲイが十分に従軍する能力があり、過去にも現在にもその能力を持って貢献してきたということを示す必要があると考えられたのである。

別の問題は、カミングアウトを通じた徴兵制へのラディカルな抵抗とゲイの権利保障の間のジレンマという図式において捨象された「ゲイ」という集団内部での徴兵制にまつわる経験の差異に関わる。カミングアウトによる徴兵制への抵抗という戦略は、全てのゲイにとって可能な抵抗のオプションであったわけではなかった。たとえば、適性検査のときにゲイであることを検査官に明確に伝えたにもかかわらず徴兵されることになった黒人でドラァグクィーンの **Perry Watkins** の例を思い出す時、この抵抗の戦略が有効であるのは、同性愛者であることが常にその人に徴兵からの猶予を保証するような場合のみであることに気がつく。**Watkins** は「私が黒人でなければ、状況は違っていたはずだ。…ゲイであるというチェックボックスに印をつけた白人の知人たちは、みんな軍隊に行かなくてもよかった」と当時について語っている（**Humphrey, 1990, p. 256**）。彼は軍隊で自分の性的指向を隠さず、時にはドラァグクィーンとしてショーをすることもあったが問題視されることなく、退役の直前になって同性愛者であることを理由に除隊させられた。彼はこの件を最高裁まで争い、後に名誉除隊を勝ち取っている。第1節でも確認した通り、ベトナム戦

争時に兵士の構成は有色人種や貧困層に偏り、負傷率や死亡率も高かった。新兵を確保する必要と部隊の団結の脅威となり得る同性愛者を排除する必要の間で常に揺れている軍隊による同性愛者兵士の排除は画一的でなく、戦況や部隊の状況に合わせて時に恣意的かつ選択的に行われ⁴、徴兵センターにおいては同性愛者であるという事実よりも、その時点での戦況、その人の経済状況や教育状況、人種といった要因が決定的なものとなることがある。ゲイ・アイデンティティに戦争と徴兵制度への抵抗の可能性を読み込む戦略が前提としていたのは、暗黙のうちに白さと特定の階級性を帯びていたゲイ・アイデンティティであり、徴兵制度をめぐる性の政治に人種や階級の差異という変数が加わったとき、その戦略の限界が露呈した。ゲイ解放運動が多様な社会運動との連帯を目指しつつも、常に運動の主導的な地位にあったのは白人の、中産階級のゲイ男性たちであったという事実がここに反映されているとも言えるだろう。

GLFの徴兵制への抵抗運動はこのような問題と限界を抱えていたが、徴兵制への抵抗とゲイの権利保障のダブルバインドは、1969年末にゲイ活動家同盟（Gay Activist Alliance, GAA）を結成したゲイたちによって「解決」されることになった。1969年7月に結成されたGLFニューヨークから離脱したメンバーたちが新たに結成したのがGAAであったが、彼らはGLFから離脱した最大の理由として他の社会運動や少数派との連帯よりも、シングル・イシューの運動が必要であるということを挙げている。

1969年11月の非公式な会合において…我々は懸念、怒りさえ感じていた。同性愛者コミュニティの抑圧に関する社会的・政治的变化の潜在的可能性が効果的に用いられていないことに対して。他の団体での共通の経験から、我々は構造的かつ、シングル・イシューのアプローチが、同性愛者の市民に全ての市民に保障されている権利と自由を保障するための法改正という第一歩を踏み出すための最善の策であると合意していた。（GAA, 1970）

こうして結成されたGAAは明確な構造を持つ組織によるシングル・イシューの運動を志向し、アメリカ社会において市民に保障されるべき権利と自

由の獲得を目指した。ニューヨークでGAAが結成された後、カリフォルニアでも1971年にGAAサンフランシスコが結成されている。1970年代初期の団体として、参加していたメンバーにも重複の多いGLFとGAAは、先行研究においては同じく70年代のラディカルさを象徴する運動体として評価されてきた。たしかに運動の手法として直接行動を重視するという点でGLFとGAAは共通しているが、ゲイの抑圧と第3世界の抑圧を同一線上に位置づけて彼らのとの連帯を重視したGLFと、反戦運動や黒人運動、女性運動との連帯よりも「市民としての」同性愛者の権利保障という1点に運動のリソースを集中するべきであると考えたGAAとは、そのヴィジョンにおいて大きく異なっていたことを確認しておく必要がある。

GAAのGLFからの決別は、急激に規模を拡大していったゲイ解放運動が、着実に現実的な社会変化を起こすために必要であったと評価できるかもしれない。しかし、まだベトナム戦争終結にはほど遠い1969年末に、市民としての権利保障のみに注力するべきだと考えることができるのは一体どのような人々だったのか。GLFロサンゼルス支部がカンボジア侵攻に対する1970年5月16日の抗議デモへの支持を決議した際、GLFはベトナム戦争よりもゲイの問題にのみ集中するべきという反論がGLF内部からも発された。これに対してGLFロサンゼルス支部議長のJim Kepnerは「これはゲイの問題だ。同性愛者がベトナムで死んでいる。軍隊はゲイだと言った兵士をベトナムの最前線に送るといふ政策をとっている。こういうことがずっと起こってきた」と決議を支持している (Jackson, 1970)。GAAにとってはベトナム戦争はもはや「ゲイの問題」ではなかったのだろうか。ここには、GAAが想定するゲイ・コミュニティのある種の偏りが反映されていると言えるだろう。そこで想定されているのは、ゲイであるがゆえにベトナムで最前線に送られるかもしれない人々というよりは、自分たちがアメリカ合衆国において当然に市民として処遇されるべきであると確信でき、アメリカ社会で差別されることになる要因が同性愛者であるという事実のみであるような人々であろう。そこでは、同性愛者の権利に直接関係はないと見なされるような課題にも同時に関心を持つ人々、つまり「ゲイ」という集団の中の黒人や女性、トランスの人々は徐々に居場所をなくし、GAAを去ることになった (Bell, 1971)。徴兵制への抵抗とゲイの権利保

障の間のダブルバインドが前者を切り捨てる形で解決されたとき、その構図において抑圧されていた人種と階級の問題もともに議論の枠外に捨て置かれてしまったといえる。

おわりに

本稿は、1970年代にカリフォルニアで展開したゲイ解放運動の反戦運動と徴兵制反対運動への関わりを取り上げ、カミングアウトの重視と連帯の強調というGLFの運動の特徴をおさえた上で、ストレートの左派とは異なる彼らの反戦と徴兵制反対の主張と抵抗の手法の位置づけと意義を明らかにしてきた。また、彼らが直面したジレンマや限界を指摘し、様々な社会運動との関わりの中で押し広げられた運動の射程が効果的に運動を展開するために狭められたこととその理由を考察した。

徴兵制反対運動に積極的に関与したGLFも、そこから撤退したGAAも、どちらもゲイ・コミュニティ内部の差異と不平等の問題を扱い損ねたことを確認しておくことは、ゲイ運動において再び軍隊の問題が浮上した90年代以降の運動の展開を理解する上でも重要である。GAAが示した運動のスタイルとアプローチは、再び同性愛者兵士の問題が運動の最重要課題として浮上した90年代の運動で中心的な役割を担ったCMS（Campaign for Military Service）に引き継がれたためである。60年代にはモラトリアム運動のリーダーの一人であったDavid Mixnerが立役者となって結成されたCMSは、米軍におけるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルの従軍禁止を撤廃する大統領令への連邦議会と世論の支持を獲得することを目的として結成された期間限定のキャンペーン団体である。

第一に、CMSはGAAのシングル・イシューの運動というスタイルを引き継いでいる。運動の焦点を1つに絞ることには、主張がクリアになり、広く支持を得やすくなるという実的な利点があると考えられた。しかし、そもそも米軍がどのような地域でどのような作戦を遂行しているのか、その暴力を作動させる条件はどのようなものかといったGLFがベトナム戦争について分析しようとした問いを棚上げにし、市民として軍隊における平等な待遇のみを要求したとき、それは70年代のゲイ解放運動が散々批判した愛国的な市民の「従軍

する権利」の要求に横滑りして行った。彼らは同性愛者兵士の問題を「勇気と才能、そして誇りを持って従軍している多くのレズビアン、ゲイ、バイセクシュアルのアメリカ人が、従軍を継続できるか否かという問題」として示し、自由というアメリカの理念のために献身する兵士のイメージを利用した (CMS, n.d.)。

ここでCMSが利用した愛国的な兵士は、常に白人の有能なゲイ男性としてイメージされていたことを指摘しておかなくてはならない。彼らは集団内部の差異の問題を意図的に棚上げすることで、運動の「主流化」を図ったのである (Vaid, 1995)。CMSが開催した公聴会に証人として呼ばれた兵士がほぼ白人男性のみで構成され、当時、名誉除隊を勝ち取った裁判によって名の知られていた Watkins が呼ばれなかったことは、CMSが有色人種や女性たちから自らを切り離すことによって白人エリート男性の運動として自分たちの運動を展開しようとしたことを象徴している (Bérubé, 2001, pp. 239–241)。福祉がより「黒い」問題として想像される新自由主義的な福祉改革の進む1990年代のアメリカで、黒人との対比において、従軍という義務を果たそうとする愛国的で経済的に自立した市民としての同性愛者の運動をより「白く」していくことで、CMSはホワイトハウスやペンタゴンの白人エリートとの交渉を容易にし、世論の支持の拡大を図ったのであった (Bérubé, 2001)。これは1990年代に突如として生じた傾向であったというよりは、1970年代の徴兵制反対運動がゲイ・コミュニティ内部での、とりわけ徴兵と従軍にまつわる経験の差異の問題を扱い損ねたまま、運動の射程を狭めたことの一つの帰結として理解できるだろう。つまり、従軍と徴兵における人種と階級の問題に注目すると、1970年代のラディカルなゲイ解放運動と、その後の時代の運動の間の断絶だけではなく連続性が見えてくるのである。

CMSの運動は、差別的な性格のDADTが制定されることで挫折を味わったが、彼らの採用した「従軍する権利」一点のみに運動の焦点を合わせる戦略は、2000年代の米国でのDADT撤廃運動に引き継がれ、DADT撤廃を実現させたということは序論で触れた通りである。しかし、DADTが撤廃されても軍隊の性質が変わったわけではなく、70年代にVVAWのゲイ・コーカスがすでに看破していたように、人種主義や性差別主義、ホモフォビアは戦争や軍隊の

暴力を作動させる条件であり続けている。⁵ 愛国的な同性愛者兵士が「誇り高く、誠実に」従軍することが可能になった現代の米国において、LGBT運動は戦争と暴力の問題にどのように関わっていくことになるのだろうか。DADT撤廃は同性愛者兵士の問題に一つの区切りを付けたが、それは国家と性、人種、階級、そして暴力を巡る議論の終わりを意味するものではないのだ。

本研究の一部は「卓越した大学院拠点形成支援補助金」による助成を受けて執筆された。ここに感謝の意を表する。

This research was supported in part by Grants for Excellent Graduate Schools.

Footnotes

- ¹ ホモファイル運動の中心的な団体マタシン・ソサイエティを創設した Harry Hay も、第1級市民権を追求する少数派はアメリカ社会に対して何かしらの貢献をするべきだと考えており、このためカミングアウトばかりを強調するゲイ解放運動は同性愛者の状況を変化させるには不十分だと考えていた (Hay, 1997, p. 298)。
- ² 1969年のストーンウォール暴動をゲイ運動史における大きな分岐点として代表させるナラティブの問題点はこれまで繰り返し指摘されており、1969年以前にゲイ解放運動の特徴である直接行動を重視するという傾向を持った運動が生まれていたこともこれまでの研究で明らかになっている (Boyd, 2003)。しかし本稿は、ストーンウォール暴動自体というよりも、その結果、1968年以降の反戦運動のラディカル化の影響を受けて異性愛規範に抵抗するために他の少数派との連帯の重要性を強調した GLF が誕生したことの意義を強調するために、1969年を一つの画期と位置づける。
- ³ 歴史家 Philip J. Deloria は、ベトナム反戦運動においては人種的に「赤」であった先住民と、イデオロギー的に「赤」であったベトコンのイメージは重ね合わされ、ともに純粋で反近代的な原始人として若者に想像されたことを指摘している。先住民に同一化することによって、彼らはアメリカ性から自分たちを切り離し、アメリカ帝国主義の犠牲者、批判者になることができた。白人の中産階級の学生が多数を占めた反戦運動家のそのような先住民のイメージの利用は、野蛮人としての先住民のイメージの反復でもあり、必ずしも当時の先住民の置かれた社会的な現実を反映したものでもなかった (Deloria, 1998, pp. 159-166)。
- ⁴ 戦時中に同性愛者の除隊が一時停止され、戦争が終わってから除隊されているのではないかと、という批判は長らく存在していたが、政府はこれを否定し続けてきた。しかし、2005年に同性愛者の除隊について、「部隊が警告を受信するまで除隊は執行されず、兵士は現役勤務に召集される。」と述べたハンドブックが発見、公開された。文書が公開され、陸軍はカミングアウトした同性愛者兵士を戦闘地域に配備していることを認め、戦闘のための配備を避けるために性的指向を偽って申告する兵士がいるために、もし兵士がカミングアウトした場合でも、戦闘地域に兵士を配備し、部隊の動員が解かれるまでは同性愛の問題が棚上げされると発表している (Frank, 2007)。
- ⁵ Jasbir K. Puar によれば、9.11後のアメリカでは異性愛規範に基づく共同体形成が一時的に中断され、同性愛者の一部、とくに白人のゲイ男性をそのコミュニティの一員として認可し取り込むことで、愛国主義的な感情や団結を強化しようとする傾向があるという。Puar はこのような傾向を「ホモナショナリズム」と呼び、ホモナショナ

リズムのもとでの一部の同性愛者の包含は、同性愛者に対して押し付けられていた性的逸脱者というスティグマを、人種的な他者、とりわけテロリストと疑われた中東や南アジアの移民に押し付けることによって生じていると述べ、人種による排除と一部の性的少数派の包含の間にゼロサムの関係がある可能性を示唆した。Puarのホモナショナリズム批判を想起するならば、性と人種にまつわる政治を個別にではなく同時に思考する必要はこれまでになく増していると言える（Puar, 2007）。

References

- Bérubé, A. (2001). How gay stays white and what kind of white it stays. In B. B. Rasmussen, E. Klinenberg, I. J. Nexica, & M. Wray (Eds.), *The making and unmaking of whiteness*. Durham, N.C: Duke University Press Books.
- Bérubé, A. (2010). *Coming out under fire: the history of gay men and women in World War II* (TWENTIETH ANNIVERSARY EDITION.). Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Boyd, N. A. (2003). *Wide-open town: a history of queer San Francisco to 1965* (First Edition edition.). Berkeley: University of California Press.
- Burns, S. (1990). *Social movements of the 1960s: Searching for democracy* (1st edition.). Boston: Simon & Schuster MacMillan.
- Canaday, M. (2009). *The straight state: Sexuality and citizenship in twentieth-century America*. Princeton, N.J: Princeton University Press.
- Deloria, P. P. J. (1998). *Playing Indian*. New Haven: Yale University Press.
- D'Emilio, J. (1998). *Sexual politics, sexual communities: The making of a homosexual minority in the United States, 1940-1970: (Second Edition.)*. Chicago: University Of Chicago Press.
- Faderman, L. (1991). *Odd girls and twilight lovers: A history of lesbian life in twentieth-century America* (1st Edition.). New York: Columbia University Press.
- Foley, M. S. (2003). *Confronting the war machine: Draft resistance during the Vietnam War* (1st edition.). Chapel Hill: The University of North Carolina Press.
- Hall, S. (2008). Protest movements in the 1970s: The long 1960s. *Journal of Contemporary History*, 43 (4), 655–672.
- Hayden, T. (2009). *The long sixties: From 1960 to Barack Obama*. Boulder: Paradigm Pub.
- Hay, H. (1997). *Radically gay: Gay liberation in the words of its founder*. (W. Roscoe, Ed.). Boston: Beacon Press.
- Humphrey, M. A. (1990). *My country, my right to serve: Experiences of gay men and women in the military, World War II to the present* (1st edition.). New York, NY: Harper Collins.
- Johnson, D. K. (2004). *The lavender scare: The cold war persecution of gays and lesbians in the federal government* (1st edition.). Chicago: University of Chicago Press.

- Kissack, T. (1995). Freaking fag revolutionaries: New York's Gay Liberation Front, 1969–1971. *Radical History Review*, 1995 (62), 105–134.
- Lehring, G. L. (2003). *Officially gay: The political construction of sexuality by the U.S. military* (New edition.). Philadelphia: Temple Univ Pr.
- Lekus, I. K. (2004). Queer harvests: Homosexuality, the U.S. New Left, and the Venceremos Brigades to Cuba. *Radical History Review*, 89 (1), 57–91.
- Meyerowitz, J. (2004). *How sex changed: A history of transsexuality in the United States*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Mixner, D. (1996). *Stranger among friends*. New York: Bantam.
- Oropeza, L. (2005). *¡Raza Sí! ¡Guerra No!*: Chicano protest and patriotism during the Viet Nam war era. Berkeley: University of California Press.
- Puar, J. K. (2007). *Terrorist assemblages: Homonationalism in queer times*. Durham: Duke Univ Pr.
- Suran, J. D. (2001). Coming out against the war: Antimilitarism and the politicization of homosexuality in the era of Vietnam. *American Quarterly*, 53 (3), 452–488.
- Vaid, U. (1995). *Virtual equality: The mainstreaming of gay and lesbian liberation* (1st Anchor Books hardcover edition.). New York: Doubleday.
- Varon, J. (2004). *Bringing the war home: The Weather Underground, the Red Army Faction, and revolutionary violence in the sixties and seventies*. Berkeley: University of California Press.
- Westheider, J. E. (1999). *Fighting on two fronts: African Americans and the Vietnam war*. New York: NYU Press.
- Wu, J. T. C. (2013). *Radicals on the road: Internationalism, Orientalism, and feminism during the Vietnam era* (1st edition.). Ithaca: Cornell University Press.

一次史料

- Aiken, D. L. (1971, June/July). Gay draft resistance. *Gay Sunshine*.
- Bell, A. (1971, January 27). An open letter to Gay Activists Alliance from Arthur Bell. Reel 17, Series 1. Committee Files, GAA Records, New York Public Library.
- CMS, (undated). They could die for liberty. they don't even have!. Folder 2, Box 127, Copy Berg Papers, New York Public Library.
- Democracy Now!. (2010, October 22). Does opposing "don't ask, don't tell" bolster US

militarism? A debate with Lt. Dan Choi and queer activist Mattilda Bernstein Sycamore. Retrieved from http://www.democracynow.org/2010/10/22/does_opposing_dont_ask_dont_tell

Frank, N. (2007, July). Research note on Pentagon practice of sending known gays and lesbians to war. Retrieved from the PALM Center website: <http://www.palmcenter.org/publications/dadt/Research%20Note%20on%20Pentagon%20Practice%20of%20Sending%20Known%20Gays%20and%20Lesbians%20to%20War>

Gay Activist Alliance. (1970). Once upon a time. Reel 17, Series 1. Committee Files, GAA Records, New York Public Library.

Gay Caucus of the VVAW. (1971, November 27). Open letter to Vietnam Veterans Against the War. Folder 11, Box 100, Barbara Gittings and Kay Tobin Lahusen Gay History Papers and Photographs, New York Public Library.

Gay Liberation Front Los Angeles. (undated). Revolutionary homosexual draft resistance. Folder 15, Gay Liberation Front Los Angeles Records, ONE National Gay and Lesbian Archives, University of Southern California.

Jackson, D. (1970). Gay lib condemns war. File 1, Don Jackson Correspondence, New York Public Library.

Jackson, D. (n.d. a). Observations, hypotheses and assumption on the gay community. Don Jackson Subject File, ONE National Gay and Lesbian Archives, University of Southern California.

Jackson, D. (n.d. b). Gay lib calls for draft policy change. File 2, Don Jackson Correspondence and Submissions to Gay Power, New York Public Library.

Kyson Jr., H. (1972, January). Gay military resistance. Folder 11, Box 100, Barbara Gittings and Kay Tobin Lahusen Gay History Papers and Photographs, New York Public Library.

RAND Corporation National Defense Research Institute. (1993). Sexual orientation and U.S. military personnel policy: Options and assessment. Retrieved from http://www.rand.org/pubs/monograph_reports/MR323.html

People's Peace Treaty, Gay Preambles. (1971, June/July). Gay Sunshine.

Wittman, C. (1969, May). Gay manifesto. Folder 30, Ctn. 4, Sexual Freedom League Records, Bancroft Library, Berkeley, University of California.

Young, A. (1971, November). Out of the closet: A gay manifesto. Ramparts, Folder 2,
D. E. Bertelson Papers, GLBT Historical Society, San Francisco.

Double bind of “the right to serve”: Gay liberation movement and anti-Vietnam War movement in the United States during the 1970s.

Yuki TAKAUCHI

The infamous U.S. military policy toward gay soldiers, “Don’t Ask Don’t Tell,” was repealed in 2011. Many celebrated a big victory for the LGBT movement, saying, “now gay soldiers can serve openly and honestly. “ However, was “the right to serve” really what LGBT communities asked for? Looking back on the history of the LGBT movement in the U.S., “the right to serve” was not always the self-evident goal for the movement.

This article analyzes the gay liberation movement in the U.S. in the early 1970s, which actively engaged in the anti-Vietnam War movement and tried to resist against the draft. Using a historical approach, I examine the activism by the Gay Liberation Front (GLF) chapters in California. I demonstrate how the military policy that discriminated against gays as being unfit for service made the gay liberation movement’s strategy toward the anti-draft resistance different from the one by straight men. In order to radically resist against the military draft policy, GLFers chose to come out as gay and dared to be classified as 4-F deferment (unfit for service). Their resistance against the draft through coming out originated from their belief in the radical potential of coming out to change a homophobic society.

However, their strategy had two problems. The first was the double bind they faced when they needed to criticize both the military’s discriminatory policies and the military itself. Though they ultimately wanted to ban the military, they also needed to prove their ability to serve and improve conditions for gay soldiers. Unable to handle this double bind situation, GLF yielded to the Gay Activist Alliance (GAA), which claimed the necessity of concentrating their time and energy exclusively on issues directly related to the gay community. The second problem was their difficulty in taking

differences among the gay community into consideration in creating their strategy against the draft. Because of institutionalized racism and classism in the military, coming out did not always secure the 4-F deferment, especially for people of color and working class gay men.

In conclusion, I situate the gay liberation movement's efforts to oppose the Vietnam War and resist against the draft in the history of the LGBT movement in the U.S. I trace how GAA's single-issue movement of claiming their right as U.S. citizens resulted in the patriotic claim for "the right to serve" in the 1990s and thereafter.

Key words:

gay liberation movement, Vietnam War, anti-imperialism, gays in military, 1970s.

